
俺の赤と黄色と白の青春（仮）

IZUMI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の赤と黄色と白の青春（仮）

【Nコード】

N1951Y

【作者名】

I Z U M I

【あらすじ】

日常生活で、定期的に幼なじみで吸血鬼の少女に血を吸われている少年の物語。

俺の幼なじみⅡ吸血鬼 Part 1 (前書き)

友人にと遊びで作った小説です。生暖かく見てください。

俺の幼なじみⅡ吸血鬼 Part 1

吸血鬼なんて伝説ではない世界。種としての吸血鬼、『Homo sanguisibilis』そして、飲血中毒患者が、混在している世界。

……種としての吸血鬼は、『Blood drinker』《ブラッドリンカー》と呼ばれており、ヒトよりも長寿。更にヒトに比べ約0.8倍で成長し、最大150年以上生きると言われている。ネアンデルタール人『Homo neanderthalensis』よりも遅く分岐した種や、彼等とヒトの混血種が変化したとも言われているが、あまりよく分かっていない飲血衝動が現れる珍しい人類だ。

彼等は、ヒトよりも筋力に優れ、握力は、成体男性で平均80kg程と筋力もヒトを越えるものを持っている。故に……

高校に入学直後に、ブラッドリンカーの講義かよ。小学五六年から始まる、ブラッドリンカーとの関わり方の教育。彼等は、20世紀になる前までは、化け物として恐れられていた。彼等は、20世紀半ば、ある生物学者により人間に程近く異なる種であることがしられた。吸血鬼。

その後少なくなっていた生息人数も徐々に増え今や四分の一が彼等である。

そして俺、はなまき けいすけ花巻啓介は幼なじみに、あかつき りいさ暁梨依紗がいる。

彼女も高校一年なのだが、見た目が幼い一目見ただけでは、中学生の少女に見える。

俺もそうだが、彼女もいわゆる純血家系で、小さい頃から知っているから違いもわかりやすい。

「花巻、確か梨依紗ちゃんブラッドドリンカーだよな？ かわいくていい子じゃん。」

高校に入学してから友人になった、秋山賢が、声をかけてきた。授業中だぞ、おい。

「他に、何が言いたい？」

「いや。啓介は、周りの幸運が見えてないのではないっかけてね。」

「それだけか。」

俺は、教師が始めた板書に目を移した。
とりあえず、今はブラッドドリンカーの連中は、ヒト『Homo sapiens』《ホモサピエンス》の授業でも受けているのだろう。

授業の後の5分休憩。

「ねえ、啓ちゃん。」

ブロンドの髪が俺の後ろから垂れてきた梨依紗だ。

ブラッドドリンカーは、ヒトに比べて、アルビノが、多いらしい。

いわゆるペットではアルビノになる割合が大きいのが良い例だから、金髪碧眼も多い事になるのか？

いつの間にか、透き通るような肌をした腕が俺の首に巻き付く。

「聞いてんのか。これ以上反応しないんなら、絞めちゃうよ。（笑）」

不敵な笑みを浮かべながら、……絞めた。

「ッー。これ以上力を込めるな。俺もう死んじやうから。」

「啓ちゃんが、死んじやうのは、嫌だな。でも……誰かに殺されるなら私が殺してあげる。（笑）」

『でも、』から耳元でボソツと言われたその言葉は、今俺の命が俺の元にない事を物語った。

「長い付き合いなのに私の事が分からないほうが悪いんだよ。」
腕をとり妙に勝ち誇った笑顔で答えた。

「もうじき授業始まるんじゃないかねえ？」

「大丈夫、席近いし。それでも帰れなんて言うなら血を吸っちゃうよ。」

梨依紗は、綺麗な碧眼と長く鋭い犬歯を見せながら、笑った。

「ジョークに聞こえないからやめろ、幼なじみだからたまに吸わせてるが、痛いんだぞ。しかも吸いすぎた時なんか貧血でくらくらする。」

「私は良いんだけどな。」

たしか梨依紗に俺が、初吸血されたのは、小学生の、四年の頃に図工の時間、小刀で指を軽く切った時に隣に居合わせたあいつが、しみみ見てぱくつきやがった。

当時は、他にもブラッドリンカーがいたはずだ。だがなぜかあいつが俺の指を口の中に入れて、吸っていた。

そのあと俺は、幼なじみに血を飲まれた事がショックで倒れた。そのあとの世話を、彼女はいろいろと俺にしてくれたらしい。

この事がきっかけで、これまで以上に家族間の交流が増え、さらに遠足や特に修学旅行先で、腕や首を噛まれ続けた。何でも、彼女曰く、『啓ちゃんの、美味しいんだよね。』だそうだ。

「でも、今ここに私がいるのは、それが目当てではないのだ。」

「じゃあ何だ？血以外になんかほしいものでもあるのか？」

「お昼は、私と一緒に食べてね。」

そう、命令して席についた。なるへそ、デザートにでもされそうだ。

俺の幼なじみⅡ吸血鬼 Part 2 (前書き)

設定が設定なので、あまりいいシーンではありませんが……どうぞ。

俺の幼なじみⅡ吸血鬼 Part 2

日本人と思えないような女子が集まった空き教室。俺、花巻啓介は少し離れて、幼なじみ暁梨依紗は友人達と仲良く昼飯を食っていた。あまり日の入らないように設計された北棟にある教室。取り合えず、現状把握を。

——明るい所を嫌う……いや、紫外線を嫌っているブラッドドリンカーは、この北棟の教室に集まる事が多い。

だからか、よくフードまで付いたブラッドドリンカー用特殊制服を頻繁に見かけ出す。とりあえず言っておくが、伝説の吸血鬼のように死ぬわけではない。赤く日焼けする程度。ヒトとは違うものである程度紫外線をガードしているらしいが……。

無論、梨依紗もフードがある制服だったりする。夏は、暑くないのかな？

ヒトは、『ここ、学校の中で暗い所だから嫌だ。』何て言って寄り付かない事が多い。

確かに暗いから怖いっつーか窓らしきものが無いんだよ、ほぼ壁だし。下には10cm程度の縦幅しかない窓があって、基本は換気システム（全教室にある大規模な換気扇）を常時着けているらしい。

彼女は比較的温厚な奴らのところを選んでくれたとのことだ。梨依紗曰く。

俺が今の教室に入る前に梨依紗に、「中は、私の友達の子しか居ないけど。ヒトなのは啓ちゃんだけなんだから、絶対血を出さないでね。そんな事したら、みんな啓ちゃんを襲うかもね。」なんて笑われた。

男の俺が、梨依紗を始めとする女子高生に襲われるのはかなりシュールだし、死にたくない。

そんな訳で、何も内見てないがーっ命名。吸血鬼ハーレム、否『吸血鬼の料理店』^{バンパイアレストラン}。他のヒトの男子も騙して連れて来るべきだった。教室に入ってから、梨依紗はまず俺を彼女達に紹介した。空気が若干鋭くなるのを感じた俺は、怖くなって少し離れた所で座って飯を食う事にした。――

よし現在、梨依紗が、楽しそうに友人と飯を食べている。何とまあ微笑ましい光景じゃないか、彼女達が吸血鬼でなければ。

「ねえ、何で花巻君は、そんな所にいるのお？」

突然の声かけに驚いたが、とにかく顔を上げた。特殊制服を身に纏った他の少女達より大人な顔で白雪のような肌にうっすら血の紅が透けて見える。紅い瞳、白銀の髪に黒のハーフリムメガネをかけた女子生徒が、目の前に立っている。

「ああ、少し……な。微笑ましい光景だんと思って。」

彼女は、少し驚いたような顔をして次の瞬間噴いた。

「笑うなよ、良いじゃ無いか。幼なじみが、楽しそうに友達と会話してるのを眺めたって。」

「ああ、嫌なふうに感じたならゴメン。そうじゃなくて、ここにヒトの男子生徒は、珍しいなあってねえ。後お、その言い方が保護者みたいだなあって。」

そこでの彼女の笑顔は、薄暗い教室のはずなのに彼女だけが、まばゆいの光りを放っているように見えた。すっごい美人だ。でも保護者は、無いだろ。まだ高校入ったばかりだぜ。

「そういえばあ、あなたの名前は聞いたけどお私の名前を言ってなかったねえ。私はあ、橘向日葵^{たちばなひまわり}だよ。こんなだけどヒトとブラッドドリンカーのクオータなんだあ。よろしくねえ。」

「クオータか、じゃあ血を吸ったりは？」

「私はあ、ヒトの血が多いからねえ。飲まないよお。」
「そうなんだ。」

ゆったりとした口調のおかげで、楽しい時間が出来た。

「向日葵ちゃん。さっきあったばかりで何でそんなに啓ちゃんと仲が良いのかな？」

梨依紗が、笑顔で現れた。黒いものが背後に見えるのは、気のせいだろう。

「啓ちゃん。こういう娘好きなんだ？私がいるのに。死にたいの？」
いつにもましてすっごい笑顔だ。キラキラしたものが見える、黒いけど。

「わかった、わかったから殺すな。」

「分かってないくせに。……でもいいや、私が手をかければ、啓ちゃんが私の中で永遠になるよ。」

やばい、マジで鮮血ものになる雰囲気だ。

「やめろ、いつも近くにいます。」

「しょうがないなあ、まあいいや。そんな啓ちゃんにいいお知らせです。私が、殺さない程度のストレスで髪を白くしてあげるから、銀髪さんを追い掛け無くても良いのです。」

女神のような笑顔で死神が囁いた瞬間だった。

「あー、でも啓ちゃんが白くなっても意味がないのか。どうしようかな？」

多分、彼女は、自分が出来る最大限にかわいい仕草をしているつもりだろう。端から見ればかわいいのだろうが、吐いている言葉がグロイ。

そんなこんなをしていると、鉄サビに似た匂いが、鼻をくすぐる。

「なあ、梨依紗さん。」

「何かな？啓介君、そんなに改まって。」

「俺の病氣を知っての飲血かな？」

「啓ちゃんの病氣って何だっけ。」

梨依紗が、笑いながら目を反らした。俺に飲血を誘っているらしい。
「飲血中毒なの忘れたのかよ。」

飲血中毒は、俺が持っている病氣だ。精神病らしい。俺は、中学生

くらいに発症した。今では、他人も自分も傷を付けないが、その代わりに暁家にて輸血パックの血を、月に二・三度一緒に頂いている。とりあえずほとんどこれが理由で、最近では梨依紗に血を飲ましている。

とにかく飲血を、この国は嫌な様には見ないが、俺は、どうにか治したい。

「なんだ。花巻君、飲血中毒なんだ。なら飲もうよ。」

「大丈夫、輸血の消費期限が切れた物だから。」

「あそこまで避けてるのに、私たちと同族なんだ。何で避けるの？」
そこの真のバンパイアのお嬢様方は、かわいい顔して恐ろしいことを吐いていらっしやる。

それに輸血パックから血をティーカップに注ぎ彼女達は飲もうとしている。

「橘さんは、飲まないんだっけ？」

俺が、苦し紛れに発言する。

「ゴメエン。血を飲むことにい、私い抵抗があるんだあ。」

「だよね。それが、普通の対応だよ。ごめんね。」

「啓ちゃんがこれ飲んでよー、私は啓ちゃんのラッパ飲みするからー。」

紅黒い液体の入ったカップを金髪の少女から渡される。酷いシーンだな。

「そういえばこっちのほうが好きだったよね。」

まるでコーヒーにミルクかシロップを入れるようにカップに液体が注がれる。今まで紅黒かった液体は、みるみるうちに鮮やかな紅と化した。注いだ液体には、酸素かオゾンのナノバブルが混ざっていたのだろう。もっとほかのものかもしれないが……………。

「ほら綺麗になった。だから早く飲んでよ、ラッパ飲みたいよ。」
駄々っ子か！あと、俺はペットボトルじゃねえ、…………でもこの匂いは、もう我慢も無理かも。

「飲む。飲みますよ。梨依紗、この次体育だからそこら辺配慮しろ

よ。」

「やったー。ラッパ飲みだー。」

俺が先にティーカップから飲み、梨依紗が、俺が、カップを置く事を待ち望んだように首筋を噛んだ。

見た目は中一でも、体はやはり高校生なのか、後ろから抱き着くように吸血行為をしているため、胸が当たる。

金髪、碧眼の女子高生に後ろから抱き着かれるなど、一般高校生には甘すぎる瞬間だが、吸血の痛みが襲った。

いつもなら、痛いだけだが、全身に別物の感覚が走る。

何と言うべきか、全身が疼く感覚かな？

結局俺は、異様な感覚のまま吸われた後、スポーツドリンクを飲んで、体育へ。そして授業中に貧血で倒れた。

当たり前だよな。スポーツドリンクは、すぐに血にはならない。血を飲んだとしてもそんなに早く効果はでないしな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1951y/>

俺の赤と黄色と白の青春（仮）

2011年11月6日11時06分発行